新版（しんぱん）　指導要文集（しどうようもんしゅう）

第一章（だいいっしょう）　信心の基本（しんじんきほん）

御本仏（ごほんぶつ）の大慈悲（だいじひ）

日蓮が法華経の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶことなけれども、難を忍び慈悲のすぐれたることはおそれをもいだきぬべし。

（005開目抄）

御本仏の大慈悲72ページー13行）

日蓮の法華経の理解力は、天台大師、伝教大師に比べて、千万が一分にもおよびませんが、難を忍び慈悲の勝れている点では、天台、伝教も敬い、畏怖（恐れかしこまること）の心をもつでありましょう。

一念三千を識らざる者には、仏、大慈悲を起こし、五字の内にこの珠を裏み、末代幼稚の頸に懸けしめたもう。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 御本仏の大慈悲146ページ-16行）

一念三千をしらない末法の人びとに対して久遠元初の御本仏（日蓮大聖人）は大慈悲を起こし、妙法五字に一念三千の球をつつんだ独一本門の大御本尊を顕して、後の世の仏法に未熟な衆生の頸に懸けてくださったのです。

日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし。日本国の一切衆生の盲目をひらける功徳あり。無間地獄の道をふさぎぬ。

（010 報恩抄

御本仏の大慈悲 261ページ－10行）

日蓮の慈悲が広く大きいならば、南無妙法蓮華経は末法万年以上、未来永劫に弘まっていくでありましょう。日本の国にあらゆる人びとの宗教に対する盲目（無知）を開く力があり、無間地獄への道をふさぐものなのです。

願わくは、我を損ずる国主等をば、最初にこれを導かん。我を扶くる弟子等をば、釈尊にこれを申さん。我を生める父母等には、いまだ死せざる已前にこの大善を進らせん。

（037顕仏未来記

御本仏の大慈悲612ページー3行）

願わくは私を迫害した国主たちを最初に成仏への道へ導いてあげたいものです。日蓮を助ける弟子たちのことを釈尊（久遠元初の自受用報身如来）に報告しましょう。またこのような自分を

生(う)んでくれた父母(ふぼ)には、生(い)きているうちにこの最高(さいこう)の仏法(ぶっぽう)をおすすめしたいものです。

今、日蓮は、去ぬる建長五年癸丑四月二十八日より今弘安三年太歳庚辰十二月にいたるまで、二十八年が間、また他事なし。ただ妙法蓮華経の七字五字を日本国の一切衆生の口に入れんとはげむばかりなり。これ即ち、母の赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲なり

（050 諫暁八幡抄

御本仏の大慈悲 742ページー3行）

一切衆生の同一苦は、ことごとくこれ日蓮一人の苦なりと申すべし。

（050 諫暁八幡抄 御本仏の大慈悲 745ページー9行）

あらゆる人びとが受けているすべての苦しみは、全部、そのまま日蓮一人の苦しみであります。

南無妙法蓮華経と唱え奉って、日本国の一切衆生を我成仏せしめんというところの願、しかしながら

「如我昔所願」なり。終に引導して己身と和合するを、

「今者已満足（今、已に満足しぬ）」と意得べきなり。

（095 御義口伝

御本仏の大慈悲 1003ページー16行）

一切衆生の異の苦を受くるは、ことごとくこれ如来一人の苦なり

（095 御義口伝 御本仏の大慈悲 1056ページ－14行）

あらゆる人びとの種々のさまざまなすべての苦しみは、すべて日蓮ただ一人の苦しみでもあるのです。

今(いま)、日蓮等(にちれんとう)の類(たぐ)い、南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)と唱(とな)え奉(たてまつ)る念(ねん)は、
大慈悲(だいじひ)の念(ねん)なり

（095御義口伝(おんぎくでん)

御本仏(ごほんぶつ)の大慈悲(だいじひ)1057ページ-13行）

日蓮を用いぬるとも、あしくうやまわば国亡ぶべし。いかにいわんや、数百人ににくませ、二度まで流しぬ。この国の亡びんこと疑いなかるべけれども、しばらく禁をなして『国をたすけ給え』と日蓮がひかうればこそ、今までは安穏にありつれども、ほうに過ぐれば罰あたりぬるなり。

（107 種々御振舞御書
御本仏の大慈悲 1239ページ－14行）

日蓮を用いたとしても、悪しく敬う（間違った扱い方をする）

ならばかならず国は亡びるでしょう。まして敬うどころか数百人に憎ませ、二度まで流罪にしました。この国が滅びることは疑いがないけれども、しばらく神々を止めて国を助け給え、と日蓮がひかえていたからこそ今まで安穏であったけれども、道理にあわないことがあまりにも度を越したから罰が当たってしまったのです。

様々

ようようにおわするに、御辺はその一分なり。心ざし人にすぐれておわする上、わずかの身命をささうるもまた御故なり。天もさだめてしろしめし、地もしらせ給いぬらん。

殿いかなる事にもあわせ給うならば、ひとえに日蓮がいのちを天のたたせ給うなるべし。

（205 四条金吾殿御返事（智人弘法の事）御本仏の大慈悲 1562ページー16行）

去ぬる建長五年太歳癸丑四月二十八日に、安房国長狭郡の内、東条郷、今は郡なり。天照太神の御くりや、右大将家の立て始め給いし日本第二のみくりや、今は日本第一なり。この郡の内、清澄寺と申す寺の諸仏坊の持仏堂の南面にして、午時にこの法門申しはじめて、今に二十七年、弘安二年太歳己卯なり。仏は四十余年、天台大師は三十余年、伝教大師は二十余年に出世の本懐を遂げ給う。その中の大難申すばかりなし。先々に申すがごとし。余は二十七年なり。その間の大難

去ぬる建長五年太歳癸丑四月二十八日に、安房国長狭郡の内、東条郷、今は郡なり。天照太神の御くりや、右大将家の立て始め給いし日本第二のみくりや、今は日本第一なり。この郡の内、清澄寺と申す寺の諸仏坊の持仏堂の南面にして、午時にこの法門申しはじめて、今に二十七年、弘安二年太歳己卯なり。仏は四十余年、天台大師は三十余年、伝教大師は二十余年に出世の本懐を遂げ給う。その中の大難申すばかりなし。先々に申すがごとし。余は二十七年なり。その間の大難

は、各々かつしろしめせり。

（219 聖人御難事

御本仏の大慈悲 1618ページ－6行）

去る建長五年四月二十八日に、安房の国（千葉県）長狭郡のかの東条の郷、今は郡となっていますが、そこには天照太神（伊勢神宮）に源頼朝が寄付した日本第二の神領があり、いまでは日本第一になっています。この郡のなかの清澄寺という寺の諸仏坊という坊の持仏堂（仏を安置する堂）の南側で、正午に、私がこの法門（南無妙法蓮華経）を説きはじめてから、今年

は二十七年目で、弘安二年となりました。釈尊は四十数年、天台大師は三十数年、伝教大師は二十数年の後に、それぞれ生まれてきた目的（最高の教えをとくこと）をはたされました。そのあいだの大きな難は、それぞれに言いつくせないほどであります。それは前々から述べてきたとおりです。私は二十七年のいま、生まれてきた目的（大御本尊をあらわすこと）をはたしたいと思います。立宗からこれまでのあいだにうけた大きな難は、あなたがたがすでによく知っているとおりです。

日蓮（にちれん）、守護（しゅご）たるところの御本尊（ごほんぞん）をしたため参（まい）らせ候（そうろう）ことも、師子王（ししおう）におとる劣（べ）からず。経（きょう）に云（い）わく「師子奮迅（ししふんじん）の力（ちから）」とは、これなり。

（225 経王殿御返事（きょうおうどのごへんじ）

御本仏（ごほんぶつ）の大慈悲（だいじひ）1632ページ－16行）

法華経は三世の諸仏発心のつえにて候ぞかし。ただし、日蓮をつえはしらともたのみ給うべし。けわしき山、あしき道、つえをつきぬればたおれず。殊に手をひかれぬれば転まろぶことなし。南無妙法蓮華経は死出の山にてはつえ柱はしらとなり給え。

（246 弥源太殿御返事

御本仏の大慈悲 1699ページー4行）

ここに日蓮、願じて云わく「日蓮は全く誤りなし。たとい僻事なりとも、日本国の一切の女人を扶けんと願ぜる志はすてがたかるべし。

（265千日尼御前御返事（真実報恩経の事）

御本仏の大慈悲1740ページ-13行）

彼の島に行き付いてありしが、彼の島の者ども、因果の理をも弁えぬあらえびすなれば、あらくあたりしことは申すばかりなし。しかれども、一分も恨むる心なし。

（271一谷入道御書

御本仏の大慈悲1758ページ-10行）

しかるに、日蓮は中国・都の者にもあらず、辺国の将軍等の子息にもあらず、遠国の者、民が子にて候いしかば、日本国七百余年に一人もいまだ唱えまいらせ候わぬ南無妙法蓮華経と唱え候

（273 中興入道消息

御本仏の大慈悲1768ページ-1行）

実に無始曠劫の契約、「常与師俱生」の理ならば、日蓮今度成仏せんに、貴辺あに相離れて悪趣に堕在したもうべきや。

（278 最蓮房御返事
御本仏の大慈悲 1783ページー5行）

日蓮が三世の大難をもって、法華経の三世の御利益を覚しめされ候え。過去久遠劫より已来未来永劫まで、妙法蓮華経の三世の御利益尽くすべからず候なり。

（279 祈禱経送状

御本仏の大慈悲 1786ページ－2行）

日蓮、生まれし時よりいまに一日片時もこころやすきことはなし。この法華経の題目を弘めんと思うばかりなり。

（324上野殿御返事（刀杖難の事）

御本仏の大慈悲1892ページ-1行）

日蓮は生まれた時から現在にいたるまで、一日、しばしの間もこころ心がやすまったことはありません。ただこの法華経の題目を弘めようと思うばかりだったのです。

末法に入りなば、迦葉・阿難等、文殊・弥勒菩薩等、
薬王・観音等のゆずられしところの小乗経・大乗経
ならびに法華経は、文字はありとも衆生の病の薬とは
なるべからず。いわゆる、病は重し薬はあさし。その
時、上行菩薩出現して、妙法蓮華経の五字を一閻浮提
の一切衆生にさずくべし。

（359 高橋入道殿御返事
御本仏の大慈悲 1955ページー3行）

民(たみ)のほね骨をくだける砕白米(はくまい)、人(ひと)の血(ち)をしぼる搾がごとくなる
ふるさけ古酒を、仏(ほとけ)・法華経(ほけきょう)にまいらせ給(たま)える女人(にょにん)の成仏(じょうぶつ)
得道(とくどう)、疑(うたが)うべしや。
（378　妙法尼御返事(みょうほうあまごへんじ)
御本仏(ごほんぶつ)の大慈悲(だいじひ)1999ページ-13行）